

其誓願に生くる吾人等祖山健兒の小日蓮の力は偉大なり矣世界、何處にか我が敵ありや、二陣三陣續けよとの命令耳朶に響けり宗勢發展の有無は吾人等祖山健兒の雙肩にあり、オ、祖山健兒の任務や重且つ大なりと云ふべし。起てよ祖山の健兒聖誕七百年の警鐘を聞け。雄々しきかな祖山の健兒、聖誕の警鐘は亂打せり。

古きノートの中より

南陽榮昭

私等が箇人として存在して行く上に、又社會の一人として生活して行く上に、其處に自我の尊崇と自己抑損即ち妥協との矛盾が生じて来る。それも自我的な人間と妥協性に富んだ者とに寄つて、從來其の主張を異にして居た。尊き箇性を飽くまで發揚すべきだと云ふ一派が有れば、或は共同の生活上場合によりては妥協せなければならぬと云ふ。惑はざるを得ない。

惟ふに自我尊崇は折伏主義ではあるまいか、そうして妥協は攝受主義でなければならぬ。宗祖一期の弘法は此の自我の發現に外ならなかつた。圓頂美衣、顔に慈悲の笑を堪へ生如來生阿彌陀と云はれし八宗の高僧然しながら汝に生命有りや、……自己柳損の生ける屍の集ひ。……我こそは眞に生ける東海の熱狂男子！眞に自我に生き得る道は此れと鎌倉の一隅に絶叫せられた宗祖は實に自我の活現の外に何者であらう。或は怒濤逆巻く日本の荒浪に、或は秋水の大刀の下に、そは尊き自我の發現に報はれたる神聖な迫害だつた。

自我發現と妥協とを更に語を更へて云へば類化と順應とも云へる。偉人は順應と同化と二者共に把つと云ふが、本化の自覺に立てる宗祖は二者の上に超越した或る衝動よりの力であつた。其處に本化自覺の價値が有り、絶對の信仰が力の根元である事を識り得るのだ。攝受も折伏も共に只單一として存在してはならない。同様に妥協も其れ自身であつてはならぬ、必ずや自我發現の爲の妥協

でなければならぬ、純信仰を基礎としての「身は従ひ奉る様なれども心は従ひ奉らず」と云はれし我祖の言は適切に此を云はれたものである。

我祖の信仰を受けつぎ、其の御教に依つて教化せられた門下は皆不惜身命に本化の純信仰の流れを後世に傳へた。此の流れを汲んだ人々は時の專横な爲政者の慘酷なる迫害にも屈せず自我の發現に悲惨な犠牲となつた。先人の紅の血もて彩られた其の流れも、初は妥協も自我の爲のが漸く妥協其れ自身となり遂には尊き自我の生命を打ち捨て、專信順應にのみ心懸くる様になつた。祖の純信仰はいかに？先哲の血もて染めし流れは何處に？こちたき論議を戦はしてまでも攝受と云ふ美名の下に生ける屍を庇護し、妥協本來の意義を失し純信仰をなくした屍を養ひつゝあるのではなからうか

宗教は論議でない。私はいつでも思ふ……宗教に對して其の崇高さを思ふ時、理路に走つた論議や人生觀宗教觀などの説を先づ後廻しにして、只夫れ宗教としての強大なる力に感じ其の大きな總

てに合体して少さい自己の完全を期すべきだ。パイロンが悲曲マンフレンドの中に「如何に我等人間は總ての主權者なりと云ふも一は高き理想に向へる神！他は底き慾望に渴せる塵芥なり。」と云へるが如く半神半獸の我等は迷を去る事は不可能だ。が然し本化の純信仰に立つた場合、其處に同化と順應の二方面を把持し得て、攝折を超越した自我の衝動に依つて信仰の發露、簡性の爲に將社會の爲に、生き得指導し得て本化の大道をとこしへに傳へる事が出来るのだ。……と。

信仰が無い場合、攝受折伏共に單一としての價値はあるも全体としては何等の價値が無い。況や祖の本意は信仰に在せられた。我等は先づ信仰の体現に努め而して後宗祖の末流に加はるべきだ。

過去より現在へ

江原亮勇

私しの過去!!今の靜寂な宗教生活に於いて最も